

強者の戦略

こんにちは、国語科の松崎です。前回の問題、いかがでしたか？今回は解説編です。まずは問題を確認しましょう。

つぎのA・Bの二つの文章は、いずれも平定文(平中)についての説話の一部である。後の問に答えよ。

A 今は昔兵衛の佐平すけへいの定文といふ人有りけり。字あざなをは平中へいぢゆうとなむいひける。品しなもいやしからず、形有様もうるはしかりけり。けはひなども物いひもをかしかりければ、そのころほひ、この平中に勝れたる者世に無かりけり。かかる者なれば、人の妻め、娘いかにいはむや、宮仕へ人は、この平中に「物いはれぬは無くぞ有りける」。然る間、その時に本院の大臣と申す人おはしけり。その家に侍従の君といふ若き女房有りけり。形有様めでたくて、心ばへをかしき宮仕へ人にてなむ有りける。平中かの本院の大臣の御許に常に行き通ひければ、この侍従がめでたき有様を聞きて、年来えもいはず身に替へて懸想しけるを、侍従消息の返事をだにせざりければ、平中、歎き侘わびて、消息を書きて遣りたりけるに、ただ、見つとばかりの二文字をだに見せ給へと、くり返し「泣く泣くと書いて遣りたりける使の、返事を持ちて帰り来たりければ、平中「物に当りて出会ひて、その返事を急ぎ取りて見れば、わが消息に、見つといふ二文字をだに見せ給へと書いて遣りたりつる、その見つといふ二文字を破りて、薄様に押し付けて遣りたるなりけり」。平中これを見るに、いよいよ妬ねたく侘しき事限りなし。

(『今昔物語集』による)

B 今は昔、兵衛佐定文をば平中といふ。色好みにて、宮仕へ人は更なり、人の妻など、忍びて見ぬはなかりけり。思ひかけて文やる程の人の、なびかぬはなかりけるに、本院侍従といふは、村上の御母後の女房なり。「世の色好みにてありけるに、文やるに、憎からず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり」。

(『宇治拾遺物語』による)

強者の戦略

問一 A・Bの文章を比較すると、平中の求愛に対する侍従の反応が異なっていることがわかる。その相違をのべよ。

問二 傍線部(1)・(3)を解釈せよ。

問三 傍線部(2)の「泣く泣く」を「泣き泣き」と変えると、どのように意味が変わるか、わかりやすく説明せよ。

問四 Aの文章で、侍従は平中に対してどのような返事の仕方をしたのか、本文に即して具体的に説明せよ。

問五 傍線部(4)の「世の色好みにてありけるに」について、

(イ)「世の色好み」とはどういうことか、説明せよ。

(ウ)「色好み」ならば、普通、どのような態度をとることが予想されるか、説明せよ。

《解説》

平定文(「平貞文」とも表記されます)についてのお話ですね。彼を主人公とした『平中物語』は入試でよく見かけます。『伊勢物語』と同じジャンルの「歌物語」で、省略された語を補いながらしっかりと読み、和歌を解釈する必要があります。彼は色好みで有名で、『平中物語』も彼の恋愛エピソードに溢れています。簡単な文学史の知識があれば、「今回は平中のどんな恋愛の話かな?」と考えながら文章を読むことが出来ると思います。

今回は、その定文について書かれている二つの文章ですね。順に確認していきましょう。まず、Aの文から。

「今は昔兵衛の佐平の定文といふ人有りけり。字をあざなは平中へいちゆうとなむいひける。品しなもいやしからず、形有様もうるはしかりけり。」

冒頭でキャラクター設定が行われています。「兵衛の佐」というのは、「兵衛府」という宮中の警護や行幸のお供を行う人々が勤める役所で、「佐」というのはその次官のことです。「字」は漢文でおなじみの表現ですね。古文で出てきた時には、「他人が呼び習わしている呼び方」くらいに考えておけば良いでしょう。

強者の戦略

人間に対して「品」は「身分」や「品位」といった訳出をするのが適当です。この平中は、桓武天皇の玄孫にあたる人で、臣籍降下して平姓を賜りました。もとをただせば身分が高い人なのですね！

また、「形」^二「容貌」^一も、「有様」^二「振る舞い」^一も、「うるはし」という人だったそうです。「うるはし」は、きちんと整った美しさを表現するときに使います。「立派だ・端正だ・本格的である」等の訳出が思い浮かべば良いでしょう。今回は、彼の見た目や行動について説明している箇所ですので、「端正だ」が一番しっくりくると思います。

「けはひなども物いひもをかしかりければ、そのころほひ、この平中に勝れたる者世に無かりけり。」

平中は、「けはひ」^二「様子・品位」^一、「物いひ」^二「言葉遣い」^一も素晴らしい人だったのですね。ですから、「そのころほひ」^二「当時」^一、平中に勝る人は世間にありませんでした。顔立ちが整っていて、振る舞いも優雅で、物言いもうっとりするほどの人。それに加えて天皇家の血筋。平安時代に「素晴らしい」と言われるための条件がぎゅっと凝縮したような人物ですね。

「かかる者なれば、人の妻、娘いかにいはむや、宮仕へ人は、この平中に「物いはれぬは無くぞ有りける。」

傍線部が出てきました。傍線を構成している単語自体は難しい言葉はありませんね。品詞分解すると、「物／いは(言ふ)／れ(る)／ぬ(ず)／は／無く(無し)／ぞ／有り／ける」。注目すべきは、動詞「言ふ」です。「平中に話しかけられないものは無かった」と解釈してしまくと、平中はただのおしゃべり好きになっちゃいます。「平中に話題にされないものは無かった」だと、平中が噂好きになっちゃいます。

顔立ちが整っていて、振る舞いも優雅で、物言いもうっとりする高貴な人。そんな人が話題となる方面と言えば「恋愛」です。動詞「言う」には、「求愛する」という意味があります。今で言う、「言い寄る」のイメージです。人妻であつても、誰であつても、平中に求愛されなかった者はいなかった、ということですね。

「然る間、その時に本院の大臣と申す人おはしけり。その家に侍従の君といふ若き女房有りけり。形有様めでたくて、心ばへをかしき宮仕へ人にてなむ有りける。」

平中が、そんな風にあらゆる女性を口説いていた頃のこと。「本院の大臣(藤原時平)」という人がいらっしやいました。日本史の知識がなくても、「大臣」と書いてあるのでとても身分が高い人だと分かりますね。身分の高い人は、お手伝いさんを雇います。「女房」というのが、そのお手伝いさんです。「女房」というと、現在(江戸くらの文章)では奥さんのことを指しますが、古文の世界で登場する「女房」は、「貴人に仕える女性」と思っして下さい。そんな女房の一人に、「侍従の君」という若い女性がいました。彼女も平中と同様に、「形有様めでたくて」^二「容姿、振る舞いが素晴らしくて」^一、「心ばへ」^二「気立て」^一もすぐれている人でした。

強者の戦略

※「宮仕え人」とは、通常は「宮中に仕えている人」を指しますが、「貴人の邸に仕える人」を指すこともあります。今回、侍従の君は大臣の邸に仕える人ということで、「宮仕え人」と表現されています。

「平中かの本院の大臣の御許に常に行き通ひければ、この侍従がめでたき有様を聞きて、年来えもいはず身に替へて懸想しけるを、」

主人公の平中にもう一度スポットライトが当たります。彼は、大臣の邸にいつも通っていたので、侍従の素晴らしい様子というのを聞きつける機会があったのでしよう。何年も、何とも言えず激しく彼女を恋い慕っていたそうです。素敵な女性が居ると聞けば、容貌を直接見なくても恋い焦がれることが出来るというのが、いかにも平安貴族らしいですね。

「侍従消息の返事をだにせざりければ、」

平安時代の恋は、手紙から始まります。男が手紙を送り、女が1%でもその恋愛が「アリ」だと思えば、辛辣な内容であってもお返事が来るのが普通です。

でも、この侍従は、平中からの手紙にお返事さえしませんでした。「あなたのお付き合いは、断固NG」ということでしょう。

「平中、歎き侘びて、消息を書きて遣りたりけるに、ただ、見つとばかりの二文字をだに見せ給へと、くり返し泣く泣くと書きて」

お返事が来なければ、次の手の打ちようがありません。平中は、何度もお手紙を書きます。「そもそも手紙は彼女に届いているのか」「開封されずに捨てられているのじゃ無いか」そんな思いが平中の中にあっただけでしょう。「見つ」||「見た」とだけ、せめてその二文字だけでもくださいと、切実に手紙に書きました。

傍線部(2)、「泣く泣く」を「泣き泣き」と変えた場合の解釈の差を考えねばなりません。もちろん、見た目が変わっているのですから、文法的にまずは変化を理解し、その後の意味の変化を捉えていきましょう。「泣く泣く」は、動詞「泣く」の終止形(連体形)が重ねて使用されており、「泣き泣き」は、動詞「泣く」の連用形が重ねて使用されていますね。

連用形とは、どのような時に使う形でしょうか?…用言が続く時に使用される形ですね。では、平中は「泣き泣き」何をしているのでしよう?もちろん、手紙を書いていますよね。「泣き泣き」であれば、「(くり返し)泣きながら手紙を書いている」という意味になるのです。

では、終止形は?文が終わるときに使われる形ですよね。「(くり返し)泣いています」というのが伝えたい内容となりますね。

(連体形は、体言が続く形ですが、適当な体言が補えませんか、今回は不適と考えましょう)

強者の戦略

「遣りたりける使の、返事を持ちて帰り来たりければ、平中⁽³⁾物に当りて出会ひて、」

「見た、とだけでも返事をください」という思いが伝わったのか、お手紙を持って行った使いの者が、とうとう返事を持って帰ってきました！

傍線部の解釈問題ですが、「出会ひて」を「使いの者に出会って」と考えてしまうとよく分からなくなってしまうですね。よく分からない語は、分解して考えてみるのも一つの手法です。「出／会ひ／て」と考えると、平中は「物に当りて出(て)」、(使いの者に)会ひて」と解釈できます。部屋の中にいた平中が、「お返事でございます」と報告したのであろう使いの者の声を聞き、慌てて部屋から「出て」くるんですね。そのとき、「物に当りて」という状態だったのですから、床に置いてあった箱やら、調度品の角に足や頭をあちこちぶつけた、と考えることが出来ます。周囲をよく見る余裕もなく、焦っている様子が伝わりますね。ここから、「物に当たる」で「あわてふためく」という意味が生まれました。辞書にも載っている表現ですが、暗記で対処するのは難しいと思うので、状況をつかんだ上で答えていきましょう。

よって、傍線部(3)の解釈は、「あらゆるものにぶつか(るほど焦)って」が正解となります。

「その返事を急ぎ取りて見れば、わが消息に、見つといふ二文字をだに見せ給へと書き遣りたりつる、その見つといふ二文字を破りて、薄様に押し付けて遣りたるなりけり。平中これを見るに、いよいよ妬く侘しき事限りなし。」

問四にも関わる箇所ですね。侍従からの返事をどきどきしながら平中は開きます。すると…。

「自分の手紙に、『見つ(見た)』という二文字だけでもお見せください』と書いて送ったが、その『見た』という二文字を破って、和紙に押しつけて送ってきたのであった」よって、彼女の返事の仕方は、「平中が手紙に書いた『見つ』という文字を破って和紙に貼り付けたものを返事とした」と答えれば良いでしょう。

その返事を見た平中は、ますます悔しくつらい気持ちとなったということです。

続いて、Bの文にいきましょう。

「今は昔、兵衛佐定文をば平中といふ。色好みにて、宮仕へ人は更なり、人の妻など、忍びて見ぬはなかりけり。思ひかけて文やる程の人の、なびかぬはなかりけるに、」

冒頭の平中のキャラクター設定は、Aの文とほぼ変わりませんね。ポイントとなる単語としては「見る」でしょうか。

「見る」には「見る」「処置する・世話をする」のほかに「結婚する」という意味があります。平中が「人の妻」と結婚するというのはちよつと変です。当時はあくまで「一夫多妻」であって、「一妻多夫」ではありませんからね。ここでの「見る」は、「結婚する」ではなく、「異性としての関係を持つ」のイメージで解釈してもらえば良いでしょう。

平中に手紙を送られた人は、皆、平中になびいていました。

強者の戦略

「本院侍従といふは、村上の御母後の女房なり。⁽⁴⁾世の色好みにてありけるに、文やるに、憎からず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり。」

本院の大臣のもとにいた「侍従」という女房がここでも登場します。その侍従、「世の色好みにてありけるに」と説明されています。

「色好み」は、「風流を好むこと」と「恋愛を好むこと」のどちらにも解釈できる語ですので、文脈で判断する必要があります。今回は、「文やるに、憎からず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり(手紙を送ると、感じよく返事をするもの、逢うことがない)」と続きますので、男女の恋愛の場面について取り上げられていると分かります。

侍従は、恋愛を好む女であったのに、(そして、男からの手紙に返事はするのに)逢うことがなかったという不思議な女性だったのです。

傍線部(4)については、(イ)「恋愛を好む人」、(ウ)「男の誘いに応え、逢瀬を重ねる」という解答に落ち着くと思います。

最後に、問一についてです。AとBの文で、平中に対する侍従の反応にはどのような相違があったでしょうか。それぞれの文における侍従の反応をまとめると、以下のようになります。

A：手紙を無視する。返事しても平中の手紙の一部を破った物を貼り付けている。

B：感じの良い返事をするが、逢うことはしない。

特にAの内容について抽象化し、

「Aは、平中からの手紙を無視し続け、自筆の返事さえ書かない。それに対してBは、手紙への返事は感じが良いものの、逢うことは無い」とまとめれば良いでしょう。

平中を振り続けた侍従。実はこの二人の話には続きがあります。

思い詰めた平中が起こした驚きの行動と、それに対する奇想天外な侍従の反応が見物です。興味があれば有名な話ですのですぐ見つかると思います。是非探してみてくださいね。

《解答》

問一 Aは、平中からの手紙を無視し続け、自筆の返事さえ書かない。それに対してBは、手紙への返事は感じが良いものの、逢うことは無い。

問二(1) 平中に求愛されなかった者はいなかった

(2) あらゆるものにぶつか(るほど焦)って

問三 「(くり返し)泣いている」という意味から、「(くり返し)泣きながら手紙を書いている」という意味になる。

問四 平中が手紙に書いた「見つ」という文字を破って和紙に貼り付けて返事とした。

問五(イ)「恋愛を好む人」

(ウ)「男の誘いに応え、逢瀬を重ねる」